

倫理学

◇教員◇

教授：熊野純彦、頼住光子

助教：池松辰男

◇学生◇

学部：21名、修士課程：4名、博士課程：8名

「倫理学」という学問に、人が抱くイメージや期待にはおそらくさまざまなものがあるだろう。日常の行為の善悪について研究するという事を思い浮かべる人もあるであろうし、また、ソクラテスの生に重なるような「よき生」の追求を思い描く人もあるだろう。自らの人生についての問いを直接重ねようとする人もあるだろうし、また、今日的な社会問題への積極的な発言を期待する人もいよう。倫理学専修課程に進学してくる学生諸君の思いも、そのようにきわめて多様なものであろう。

しかし、それが文学部のなかで、しかも思想系の学問分野の中での倫理学研究となると、そのありかたも限定されてくる。文学部の学問が原典テキストの精密な読解を身上とするように、倫理学専修課程の学問も、倫理学についての原典テキスト、就中古典のテキストの読解をその基本とすることになる。その点では思想史研究が中心となるのであり、現実的課題との関わりは間接的なものにとどまるということになろう。そのことはしかし、倫理という言葉に対する各人各様の思いを否定するものでは決してない。むしろ古典の読解にこそ、それぞれの思いが最も豊かな奥行きをもって現実化する場面があるというのが、われわれの確信である。

したがって、倫理学専修課程は、独断と空理空論を控えるという最低限の謙虚さを要求される以外は、きわめて自由な雰囲気には満ちている。かつてこの研究室の主任教員であった和辻哲郎は、日本近代において特筆すべき倫理学の体系を築き上げたが、それは、西洋思想と東洋思想の融合および規範学としての倫理学と事実の学としての諸学の融合を目指したものである。さらに、和辻は、倫理学以外に広く人文科学一般の分野でめざまし

い成果を上げたことで知られているが、この多様な学問領域に開かれているという性格は、今日においてなお生きていけると言えるのである。学生の研究対象の選択も各人の大幅な自由に任されており、実際、これまでの卒業生の研究テーマも、洋の東西を問わず、また古代から現代に至るまで、まことに多彩である。

倫理学専修課程の講義・演習の対象領域は、西洋の倫理思想と日本のそれとに二大別される。倫理学がいち早く自覚的な形態をとった西洋の思想伝統を学ぶことは、日本倫理思想史を専攻しようとする学生にとっても欠かすことはできない。一方、西洋の倫理学に関心を持つ者にとっても、自らが背負う伝統との対話は必要である。相異なる領域への幅広い目配りが求められるのが当専修課程の特色である。

倫理学専修課程が平成 29 年度に実施した全授業を、教員ごとに列挙すれば、以下の通りである。

熊野純彦教授は、ドイツ観念論から現代のドイツ・フランス思想に至るまでの思想史的研究をふまえながら、他者、身体、言語といった問題系、また時間、所有、自己といった主題系を、倫理的に、すなわち「人のあいだ」に根ざし、「人のあいだ」にかかわる問題群として思考することを試みている。「倫理学概論Ⅰ」（「倫理学ならびに実践哲学の基本概念」）では、“倫理学”および“実践哲学”をめぐる基本概念（“テオーリア”、“プラクシス”等）を、古代ギリシャの倫理思想にまでさかのぼって考察した。「西洋倫理思想史概説Ⅰ・Ⅱ」（「近代倫理思想の諸問題」「現代倫理思想の諸問題」）では、それぞれ、西洋の近代・現代倫理思想史上の代表的な思想家（デカルト、ロック、ライプニッツ、ヒューム、ルソー、カント、ヘーゲル、ベルクソン、フッサール、シェーラー、ハイデガー、レーヴィット、シュッツ等）ならびにその主要テキストを取り上げ、論じることを通じて、西洋倫理思想史の概観を与えることを目指した。「倫理学特殊講義」（「近代倫理思想の基本問題」※池松辰男助教との連名講義）では、近代西洋倫理思想史への入門にあたって鍵となるいくつかの概念および思想家について、関連するテキストを取り上げつつ概観し、近代西洋倫理思想史入門への手引きとした。「倫理学演習(1)(2）」（「テキスト読解の方法」）では、ヘーゲルの『エンチクロペディー』のテキスト（ドイツ語）と、それに対するアンドレ・レオナルのコメントール（フランス語）をあわせて読み進め、テキストを読解する基本的な方法をとともに考えていくことを目指した。

頼住光子教授は、日本文化の根幹を形作っている仏教思想について、道元や親鸞の著作を中心としつつも、日本仏教の全般、さらには大乘仏教の經典論釈全般にわたって幅広く研究している。「倫理学概論Ⅱ」では、日本における倫理思想史の展開について、仏教、儒教、神道など主要な教説や文学等を手掛かりとしながら概説した。「東洋倫理思想史概説Ⅰ・Ⅱ」（「日本仏教思想の諸問題1・2」）では、日本仏教に大きな影響を与えた主要な大乘仏教の経論や、日本の仏教思想家の代表的著作を原典で紹介しながら、そこに含まれている世界観、人間観等を解明することを目指した。また、日本仏教を理解するために知っておくべき、仏教の基本思想や歴史的展開についても説明した。「倫理学演習(1)(2)」（「日本倫理思想史演習」）では、日本倫理思想史を考えるための基本文献として、主として折口信夫のテキストを講読した。それを通じて、日本倫理思想史の基本的な発想方法について習熟し、日本倫理思想史研究の方法論を身につけることを目指した。

その他、平成 29 年度の非常勤講師による講義の題目は、以下の通りである（肩書きは平成 29 年度当時のもの）。

魚住孝至講師（放送大学）	倫理学特殊講義「倫理学・倫理思想を今考える－歴史的現実の中で－」
木村純二講師（弘前大学）	倫理学特殊講義「日本倫理思想史における「愛」について」
中野裕考講師（お茶の水女子大学）	倫理学特殊講義「カントと構想力論の展開」

このように、倫理学専修課程は、一方では古典的学問研究を尊重しつつも、他方では、哲学、社会科学、宗教学、日本思想等の諸学問に開かれた幅広い内容を持つ学問を目指しているという点で、思想系学科のなかでも特徴を示していると言える。そのことは、当専修課程を卒業し、その後研究者の道に入った先輩の学問にも明らかである。そのような条件をどう生かすかは、学生諸君の自発的研究に期待されている。

なお、卒業生の進路について言えば、当専修課程を卒業した後、大学院への進学を希望する者、官公庁や民間企業に就職する者等、さまざまである。就職先も、新聞社、出版社、銀行、広告代理店、電機メーカー、警備会社等、きわめて多彩である。